

て降下するが、それ以上 1.1% 程度まではほとんど変化しない。

(2) 恒温変態曲線はC量の増加によつて長時間側に移動する。またノーズの温度はC量 0.82~0.94% 程度で 750°C 付近にある。

(3) C量が 0.76% 以下のものは焼入温度が上昇すると、焼入硬度も上昇するが、C量が 0.76% 以上になると、焼入温度のものはかえつて硬度が減少する傾向がある。オーステナイト化時間についてC量の高いものは短時間で最高硬度になるが、C量の低いものでは長時間を要する。

(4) 焼入状態における残残留オーステナイト量はC量の増加によつていちじるしく増加するが、600°C 焼戻によつて完全に分解される。

(5) C量が増加すると二次硬化による焼戻硬度はいちじるしく上昇するが、焼入温度の高いものではこの傾向がとくにいちじるしい。

(6) 常温における靱性はC量の増加によつて減少するが高温における抗張力は大して変化しない。高温における伸び、絞りもC量の増加によつてやや減少する。高温衝撃値はC量の増加によつていちじるしく低下する。

終りに本研究の発表を許された石原工場長に敬意を表します。(昭和 33 年 4 月寄稿)

文 献

- 1) A. B. Kinzel and C. O. Burgess, *Iron Age* **25** (1932), 488
- 2) H. Carr: *Iron & Steel*, **22** (1949), 413
- 3) 岡本, 小高: *鉄と鋼*, **38**, No. 9 (1952), 61

最 近 の 寄 贈 図 書

書 名	判型	頁数	編集者又は著者	寄贈者	寄贈年月日
鋼と非金属介在物	A 5	271	日本学術振興会	山海堂	昭 33. 2. 7
大同製鋼の現況と十四年の歩み	A 4	209	大同製鋼株式会社	左 同	〃 〃 3. 18
Proceedings of the First Japan Congress on Testing Materials	A 4	179	材料試験協会	左 同	〃 〃 3. 25
Japan's Electrochemical Industry	A 5	118	日本電気化学協会	左 同	〃 〃 4. 12
日本機械学会六十年史	B 5	395	日本機械学会	左 同	〃 〃 4. 15
鋳型および鋳物砂	A 5	105	鹿島次郎・牟田口元堂	共立出版	〃 〃 5. 12
日本の鉄鋼統計(抄録篇)	A 5	78	日本鉄鋼連盟	左 同	〃 〃 6. 19
Workington Iron and Steel Company	A 4	142	Workington Iron and Steel Co.	British Embassy	〃 〃 6. 25
オリジンハンドブック	B 4	304	オリジン電気株式会社	左 同	〃 〃 7. 10
鉄鋼業の技術管理	B 5	263	日本生産性本部	左 同	〃 〃 7. 19
分析化学進歩総説	B 5	146	日本分析化学会	左 同	〃 〃 7. 20